



頼る力を育むことも大切

プティ ヴィラージュ 自立支援担当職員（自立支援コーディネーター） 河野 幸恵

はじめにプティヴィラージュでは、2020（令和2）年度より自立支援コーディネーターを配置しています。配置されるまでは、家庭支援や生活棟担当職員が勤務外の時間を活用して、担って対応してきました。しかし、退所した者のトラブルや相談が多く、対応する職員の業務過多や勤務の都合上すぐに対応することが難しいこともあり、専属で配置することを決めました。現在は、主に退所に向けたリービングケア、退所した後のアフターケアを担っています。

卒園に向けて支援している子ども（リービングケア）

2020（令和2）年度は高校生14人、2021（令和3）年度は、高校生15人に対して実施しています。進路に関する情報提供や今後に向けた意向確認のための面接、児童相談所や保護者との連絡・調整を行っています。それらは、自立支援コーディネーターを中心とした「リービングケアプログラム」に位置付けられています。

プログラムは、年間を通して予定しており①進路に関する面接②退所に向けての面接③保護者・児童相談所との面接④自立訓練⑤性（生）教育、その他心理面接やリービングケア企画（スポーツや振り返り）など多職種と連携したものを実施しています。④自立訓練では、1人暮らしの体験を、別棟にて実施しています。家事全般のやり方などを職員が確認し、丁寧に伝えています。その期間に栄養士との買い物や調理の練習や、栄養指導などを受けています。⑤性（生）教育では、幼少期から性教育（交際と性に関する教育）だけでなく、子どもたちが生きる力を習得できるように、コミュニケーションスキルの向上や、自立のために必要な知識（家事に必要なスキルなど）を伝達しています。

そして、施設を退所する際には、これまで関わって

きた職員と思い出のアルバムを作成したり、退職した縁ある職員とリモートで話す機会を設け、施設生活の振り返りを行っています。子どもたちには、退所後も困ったらいつでも相談できる対象に職員がなれるように、また、子どもたちをこれからも応援していることを伝えられるように意識して関わっています。

さらには、月に何度かは生活棟に入り、生活実態の把握や退所後の支援につなげるための関係構築を意識して、子どもたちと関わっています。その中で、課題として感じているのは、退所後の金銭の扱いに関することです。子どもたちはアルバイトをして自立に向けた貯蓄をしていますが、それでも大学等への進学や1人暮らしをするとすると、経済的な問題や想定外の問題に直面します。さまざまな支給金や奨学金に申請して資金を貯めていますが、上手くいかないことが多いのが実情です。

年間の「リービングケアプログラム」を通して、教育や指導、実体験をするのと並行して、本人のルーツや存在意義を伝えられるように意識しています。

卒園後に支援している子ども（アフターケア）

2021（令和3）年度は、18歳から22歳までの15人に対してアフターケアを実施しています。支援内容は、LINEや電話での定期連絡や家庭訪問・面会を行っています。また、年に1回リアン会という施設行事を企画し、退所した者を施設に呼んで、レクリエーションやスポーツ大会を実施しています。令和3年度はコロナウイルスの影響で施設に呼ぶことが難しかったため、職員からのメッセージを退所者に送付しました。進学を目指す入所児童（高校生）と、卒園生である大学生がリモートで話し、大学生活や1人暮らしに関する質問をできる機会も設けました。また、就職先の会社や進学先の大学等や社会福祉協議会などの関係機関との



連絡・調整を行っています。

退所者が抱える問題点

今まで退所した者が抱える問題は多岐に渡ります。退所者同士の金銭トラブル、交友関係上のトラブル、望まない妊娠、保護者との関係悪化などが挙げられます。警察や弁護士に相談する事態も生じ、状況に応じて同行することもありました。退所者が抱える課題としては、優しいと思った人を信用して詐欺に遭う、交際相手にお金をとられるなど、誰かに依存したいという孤独感とどう向き合うかが挙げられます。孤独感から利他的に行動をしてしまい、傷つくことを繰り返していると思わされる出来事も多いです。自立支援コーディネーターとして都度丁寧に話を聞いて対処法を伝えつつ、本人のことは見捨てない、支えるといった意識を持って対応しています。ただ、状況によっては施設職員が悪者にされることもあります。退所者自身が助言を聞き入れようとしないこともあり、状況がどんどん悪化もし、気付いた時には遅かったということが何度もあります。そのような時は、無力感や罪悪感を抱きますが、一方で問題の解決の難しさを痛感します。警察や弁護士に相談しても、扱えない事案であったり、さらなる費用がかかることで諦めざるを得ないことも

多く、退所者が頼れる機関の少なさを感じます。

退所者のことをよく知っている施設（施設職員）の存在は、退所者が自分は1人ではない、施設がある、施設職員に頼ってみようという支えになっていると思います。誰もが困難に直面することがあると思いますが、そのような時に誰かに相談することは決して弱さではないと思います。むしろ何かあったときに助けを求められる強さであり、人と人とのつながりの中で、自分の人生を主体的に考え、そして長い期間を経て自律していこうとするプロセスだと思います。退所者が自分の課題を認識して受け入れ、必要な機関の支援に頼る力を育むことも退所支援の大事な視点だと思います。また、施設以外にも、退所後の支援ができる機関があると良いと感じています。

今後の課題

自立支援コーディネーターとして働くことで課題としてみえてきたことは、家庭状況が子どもたちに大きく影響しているということです。施設では、退所に向けて保証人の問題が生じ、関係が途絶えていた保護者に会うケースが幾つかありました。しかし、親への気持ちや整理されていない子どもや、親子関係が中途半端に整理されていない子どものケースほど、退所後に

